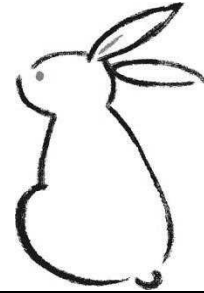




Shiro-usagi

白兔・素兎



平川塾HP



アメブロ

文責：平川 達三

知っている？ 使ってますか？

2023年01月26日(木) アメーバブログ

「あ、この曲、知ってる！」

脱テレビの日から6年目に突入。土曜日の夕方にあるらしい『僕のヒーローアカデミア』のアニメを、仕事柄リアルタイムでは見られなくとも、せめて録画で見たいワタシですが、それが出来ないのが唯一の悔しいところです。

でも、テレビに戻ったとしても、番組本体を見ているというよりも、その周囲にまわりつくコマーシャルを見せられている感覚が我慢できないから、結局見なくなるに違いないと予測できています。で、実際にテレビなしでいても不自由さは感じませんし、むしろ頭の中も静かになって、清々しています。それでも、スーパー銭湯のサウナ室に入ると強制的にテレビを見させられるわけですが、まだ自宅にテレビがありCMによる洗脳への恐怖感さえ抱くこともなかった年齢のときには、CMの音楽に起用されたクラシック音楽の曲をよく耳にしたものです。そのときに周囲の人からよく言われたのが、

「あのCMの音楽、あれ知ってるで。」

というものです。これを言ってしまうと、周囲の人のほとんどを敵に回すのは確実と思えたので(ワタシ、もと音楽専門でピアノ弾きでした)、

「知ってるって、どの程度知ってるねん？ 一部分だけ聞いて知ってるなんかは知ってるうちに入らへんわ。」とは決して言いませんでした。

それで、この「知っている」をすぐさま言うのは大人のみならず。生徒さんも、まだ説明してるのに、「あ、これ知ってる！」という子が少なくありません。ワタシ、これを言われると、その瞬間に説明をやめてしまいます。ワタシの「知っている」は「じゅうぶん」に使いこなせます。」という意味として捉えているからです。でも、「知ってる！」と言ってこちらの説明を遮った本人は、自分が発した言葉をワタシがそんなふうには捉えているとは知るよしもなし。

「それ、知ってます」は、実は諸刃の剣なのです。会話の中で絶妙のタイミングで、しかもある程度細かいところまで認識しているのを相手に感じさせる「知ってます」であれば、会話も膨らみ、本人の評価も上がることでしょう。ところが、その逆となると大変です。アイツはすぐに知ったかぶりをやるから信用できないヤツ。ホンマは何も知らんクセに、アイツの「知ってる」を信じたらエライ目に遭わされる。そんな評価になり、天と地ほどの差になることも少なくありません。

お話を生徒さんに戻しますと、すぐさま「知ってる」とか、「それ、前にも

聞いたで」とか言う子ほど、勉強ができない場合が多いのです。その現実をワタシに見出されてしまうと、ワタシからじわじわと攻められ始めます。

「責める」ではなく「攻める」です。ここが大事です。「責める」は、「出来ませんくせに、ナンですぐに知ると言うのん？」で、「攻める」は、「あれ〜？ 知ってるんちゃうの〜ん？」なので、この違いは大きいのです。

「責める」とそれ以上会話は続きません。生徒さんを追い込んでいくだけ。「攻める」はその生徒さんをワタシがいじることになるので、会話が広がります。

「責める」よりも「攻める」方が説教を避けられるので、言う方も言われている方もイヤな思をしなくてすみます。そういう中で、「知ってる」は「少なくともこの塾舎では使いこなせるようになってからしか言っはいけない言葉だ」というのを学べるようにしているつもりです。

例えば、中学1年生であればそろそろ作図を学ぶ時期ですか(3学期)。おおかたは作図の陰に二等辺三角形が潜んでいるんですが、2年生になって二等辺三角形の性質を学んだときに作図を思い出してつなげることが出来る子は皆無に近いです。

作図の問題が割とサクサクできる子には「知っている」を許可します。なぜなら、手に入れた知識というアイテムを一応使えているから。また、二等辺三角形の性質も上手にある程度の応用が出来て証明問題を解けるレベルの子も「知っている」を許可します。理由は図形と同じです。これで作図も二等辺三角形も一応アイテムを使えるレベルの「知っている」にはなりました。でも、私が要求する「知っている」には至っていないのです。

それで、二等辺三角形の性質を学ぶときに、作図の内容を思い出させ、ナンでつなげられないのかをとうとうと聞かされます。まあ、あんまりしつこく言うとホンマに嫌われるので手加減はしますが、つながらない理由は、ただひとつなのです。

問題に添付された図形をノートなどに書き写すときに作図で学んだ方法で書かないからです。つまり、せっかく学んだ知識を生かすことなくノートにすら書き写さないで、与えられた問題内の図を真っ黒けにしてドツボはまっているのは問題外。学んだ知識はアイテムです。アイテムは使わなきゃ意味がない。二等辺三角形の性質を知った時点ではアイテムを手に入れただけ。

使ってナンボ。使えてナンボ。あなたの「知ってる」は使わないアイテムだらけになっていませんか？

突然ですが難問ごっこ

2023年02月04日(土) アメーバブログ

先日、異様な数の欠席者を出した学校に通う私の塾に通う生徒さんが、激ムズ問題を解説してほしいと言って持って来ました。最初は生徒さんはもちろんですが、私も何度も撃沈させられました。塾長としての妙な意地というのかプライドというのか、そういうのもあり、翌日には何とか解けましたが、奇問珍問ではなくて久々に見舞える良問でした。

こんな感じの突発的な休校に対する宿題を配布するときとか夏休みのような長期課題にも、数学の激ムズ問題を出されるそうなのですが、あとのフォローがないとな？ それはどういうこっちゃ？ なのですが、まあここで公然

と批判しても何も動きませんのでね。こういうときは、文句たらたらを何度しようが何の解決にもなりません。だって、文句たらたらって結局はしない理由を探してるのと同じことですからね。

「文句言うてるヒマあったら、とっとと仕事せい！」

という気持ちの切り替えの方がずっと大事です。

後日、学年でどれだけの人が解けたのかをチラッと伺いましたところ、大手有名塾のトップクラスに在籍する子は解けていたそうです。

「先生、ナンで、あの子ら(トップク

ラスに在籍する子ら)は解けてるんやろ？」

と言うので、師(ワタシ)、答へて曰く。

「ああ、こんな難問ばかりを毎日してたらね、アタマが慣れてきて出来るようになるんよ。アナタもやってみる？ 可能性はどの子にも100%平等に与えられているよ。」

誤解のなきように申しますが、大手有名塾のトップクラスの子を揶揄しているワケではありません。そういう難問を前にして果敢に挑み続けるのは並大抵の気力では出来ないからです。ですから、「毎日していたらね、アタマが慣れてきて」なんことをしれっと言ってますけれど、大抵の子はまず「慣れる」思考ステージに到達出来る日まで

待てません耐えられません。何にしても、いきなり目の前に出されたら、まず怖じ気づきます。

それでもなお、1問か2問で、それも遊び感覚で「これ、解けて説明出来て正解したら、ステッドラーのシャーペンをプレゼント！」ってなことを言うと、男の子が食いつきますね。

名付けて「突然ですが難問ごっこ」。

ステッドラー社製0.7mmのシャープペンシルはワタシのお気に入りです。生徒さんの横の席で、受けた質問に答えるときに絶対に使っているアイテムです。

シャープペンシルが初めて登場したのは、ワタシが小学3年生くらいのときで、イマドキなら1個30円か50円する

大型サイズのアメちゃんが5円で3つ買えた時代に1本500円しました。今で言えばどのくらいなんですかね。2000円くらいでしょうか？ めっちゃ高級品で、しかも壊れやすかったんです。こんなゼータク品、小学3年生のガキンチョが持つ代物ではありません。が、持っていた子がいたんですね。ところが、モノの扱いが乱暴なヤツでして、学校に持って来て自慢気に使っていたのはたったの1日。2日目にして「あ、壊れた」と、ほざいておりました。

ところが、100円ショップなるものが現れて、100円でシャープペンシルが売られているのを見たとき、衝撃を受けましたものね。う～ん、でもですよ、こう言っちゃナンですが、あの妙に軽々しいのを使うから書く字が安定しないばかりか、投

げ遣（や）りな字を書いても平気になってしまうような気がしてなりません。その一方で、ワタシのお気に入りのステッドラーはやや重いのです。ワタシ、指の当たるところがゴム製のラバーになっているモノには耐えられません。気持ち悪くって。なので、指が当たるところも金属製でないアカンのです。

ものすごく書きやすそうにしているのを見て、「先生、それ貸して。」という生徒さんが多いのです。

「うわっ！ めっちゃエエ感じ。」
「でしょ？」

思わず「どや顔」をするワタシ。こういうところ、大人げないなとわれながらに思う。

こういう経緯があって、女の子さんでもこのガッシリとしたデザインのステッドラーを欲しがると結構現れていて、夏休みとかに「難問ごっこ」をするのです。こういう難問に関心を持たせるには「ごっこ」感覚が大事だと思っています。ただし、表向きは「ごっこ」なのですが、実はもうひとつ目的があるのです。

その問題に対する接し方、正解は出来ずともどこまで到達出来るかとか、どこまで根気があるかなどをつぶさに観察しているのです。将来、継続的に難問に対する関心度をしっかりとしたモチベーションで保ち続けられるかどうかをじっと察しています。



ステッドラー
知る人ぞ知るドイツの鉛筆・シャープペンシルの古参メーカーです。鎧を被った騎士の横顔がトレードマーク。

このイラストはステッドラーファンのある絵師さんが描かれたもの。絵が描けないワタシにとっては神様が描いた絵のように感じます。

ナンやよう分からんけど感動した話

2023年02月13日(月) 22時54分46秒

小学5年生のお子さんとの話。
小学2年生の中にある難問について、「お父さんに見せたら、楽勝やと言われて、ショックやったわ。」とな。「でな、ほら、図形で難しいと先生が言ってたやん？ それやりたい。」そう言うので、その図形の問題を渡しました。

しばらくうんうんと唸って考えていましたが、「先生、これ、ホンマに小学2年生レベルなん？」と、ちょっと気弱になったのを隠しながら（バレてるけどね）、ワタシに尋ねてきました。「多分、6年生くらいかな。まあ、私立受験の子やったら、2年生かか3年生でするやろな。」

この会話の時間を挟んだ後も一生懸命考えていましたが、ついにギブアップ。

そこで、緑・黄色・ピンクの蛍光色の蛍光マーカーを使って解説しました。「まずやね、横と縦を別々に考えなアカンね。この問題の場合は縦方向は簡単なんやね。トリックは横方向にあるねん。」そのように言いながら、ワタシが解説をしていくのを食い入るように見ています。

「結論から言うとな、この手の問題はほとんど全部が長方形か正方形の周りの長さになるねん。」
「えっ？ そうなん？」
「でな、ポイントはここやねん。例えばやね、『ボクはこれこれでこうなると思います』と言うたら、『どうしてそうなるんですか？ 説明してください』って言われへんか？」

この場合やったら、『長方形とか正方形の周りの長さと同じになると思います』と言うたら、みんなの前で説明せ

なアカンやろ？」
「そうそう。言われる。で、みんなに納得出来るように、みんなの前で説明出来なアカンねん。」
「そう。その説明が論理なんやね。」
「論理？」
首をかしげました。無理もないですよ。5年生だもの。学校で「論理」なんていう言葉すらあんまり聞かないでしょうし。

「うん。『ボクはこう思うねん』とか、『ボクはこうなると思うねん』というのは、単なる予測なんやね。予測はエエ加減であっても言うこと自体は悪いことやないねん。なんっちゅうても予測でしかないから『なんちゃって』でもエエねん。でもな、それを、そうやね、ストーリーを立てて相手を納得させなアカン。誰が聞いても『なるほど！』と言わせなアカン。このストーリーが『論理』やねんな。」
「ふ～ん。予測は何を言うても許されるんや？」
「まあ限度はあるで。でもたま～にあるやろ。ほら、『そんなんあり得へんやろ？』って周囲が笑ってたことが実証されて、笑っていたヤツらがビックリしてのけぞってひっくり返ってる、なんてこと。この実証が論理。実際に証明して、『これでどやっ？ 文句ないやろ？』って納得させることやね。」

そこからエジソンの話に飛びました。世界で初めて録音に成功したのはエジソンです。ジョージ・ガーシュウインの名曲『ラプソディ・イン・ブルー』のガーシュウイン自演のピアノ独奏の録音が残されていますが、この録音方法がエジソン式といわれたロール管を使った方法です。

あまりくわしくは知らないのですが、（CDの解説書を読んだだけなので）缶詰表面に蠟（ろう）を塗り、振動に合わせて動く針によって、その蠟の上に情報が刻み込まれます。それを逆回転させると、記録された音が再生されるという理屈です。このエ

ジソン式ピアノロールによる録音技術は、エジソンが発明したものを、周囲の技術者が改良を重ねたものです。その話をしながら、

「どういう人を天才というか、知ってる？ ほら、テレビとかでよく言うてる天才少年とか天才作曲家とか、そんな軽はずみさんは全然『天才』とちゃうで。」

「じゃあ、どんな人？」

「100年をあっという間に飛び越える発想をする人。何百人の秀才が束になってかかっても天才ひとりには勝てんのや。」
「ナンで？」
「秀才は天才の発想を改良することは出来る。でも、その元になることは考えつかれへんねん。その元になる発想が100年を超えてるねんな。」

エジソンもまた録音方法に改良を重ね、ついにレコード盤の製造にまで実用化をさせました。
S P（short playing）版ですね。

その後、E P（extended play）版がシングル・レコードといわれるようになり、30cmのL P（long playing）版を経て、今ではC D（compact disk）となり久しいですね。因みにD V Dは「Digital Versatile Disc」の略で、「デジタルの多用途の円盤」という意味なのだそうです。

その5年生君に尋ねると、S P・E P・L Pという区別はさすがに知らなかったようですが、レコードは知ってましたね。

これも因みにですが、エジソン式ピアノロールで録音されたガーシュウインの原音のC Dをもう20年以上も前に聞いてもらったことがあるのです。する

と、こんな質問をしてきたのです。

「先生、ピアノ以外にずっとバチバチと鳴っている音は、ナンの楽器の音ですか？」

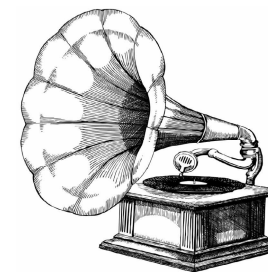
彼らはノイズを知らなかったんですね。無理もない。ノイズなんて全く縁のない音源を当たり前のように聞いてきた世代ですからね。
「でね。今から100年以上も前にね、エジソンはこんなことを言っていたんだって。記録の方法はまだ分からないけれど、レコードとかだったら記録されている溝が破壊されれば役に立たなくなる。だからきつと、将来は鏡のようになるだろう。」

C DやD V D（ブルーレイ）。鏡のようになっていますね。彼は100年以上の将来をもうこのときに予想していた。でも、当時はまだまだ技術がなかったから、さすがのエジソンも証明（実証）はできなかったのです。

その後、「論理」の話に戻りました。

「でね、この図形の解説ね。後で君が何度見ても分かるように、あるいはね、これを君が使って、例えば授業で何度説明しても同じ説明ができ、それを聞いた人が何度聞いても同じ理解を得られるように、ボクは書いたつもりです。これが『論理』。何度でも再現が出来て、誰が同じ説明をしても同じ理解を得られること。そのためには、誰でも納得させられるストーリーが書けなくちゃいけない。これが算数や数学を勉強する意味です。」

「ナンやよう分からんけど、ナンか感動した。」そうです。



知的好奇心を失うとき

2023年02月04日(土) アメーバブログ

● 80点の転落

「勉強をすることがおもしろい」

そのように言ながら、勉強をんしんでいた小学生さんがいました。

当時、小学4年生。3年生の終わり頃に私の塾とご縁があった子でした。初期の頃、唯一ともいえる苦手意識のあったものがあります。それは図形でした。

三角定規の角度が覚えられないというよりも、

「こんなの覚えて何になるの？」

という意識の方を強くもっている様子でした。

そこで、コンパスと直線定規を取り出し、任意に（適当に）引いた直線を垂直二等分する方法とか、任意に書いた角を二等分する方法とか、同じ直線上にない3点を通る円の中心を求める方法とか、いわゆる、中学1年生の3学期に学習する作図を彼の目の前で実演したのです。

あるいは、任意に書いた多角形の外角を全部合わせると、必ず360度になると

か、三角形の外角を利用した任意に書いでも、任意に引いた直線や任意で書いた星形の5つの尖った部分の角度を合わせると必ず180度になるとか、話ついた角を三等分する方法はまだ証明されていないこととか、計算式のパドックス的なことにまで及びました。

例えば、「 $1 \div 3 \times 3$ 」を当時の計算機ですると、答は「0.999999.....」になるのに、分数の考え方を使うと同じ「 $1 \div 3 \times 3$ 」という式であっても答は「1」になる。というような不思議なお話をいっぱいしたのです。

すると、目をキラキラさせて、避けていた図形に関心を抱き始めました。

子どもさんって「どうして？」を連発する時期、いわゆる知的好奇心が旺盛になり始める時期があります。早い子であれば発語からしばらくして、言葉もはっきりして来た頃から始まります。

ところが、いつの間にかその旺盛さが徐々に少なくなっていくこともある中で、その子はずっと知的好奇心を持っていたのです。

分度器を使わずにコンパスと直線定規だけを使い、彼の目の前でワタシが繰り広げる世界は、およそ当時の彼が学校では習わないコンパスの使い方なので、すぐさまワタシのコンパスに手を

伸ばしてきました。

「書いてみる？」

即座にニコッと笑ったので、その場で作図の授業となりました。そのときに正三角形・二等辺三角形の概念も話し、正方形・長方形のほかにも平行四辺形とかひし形や台形とかがあって……。

という話から、三角定規のことになり、今まで覚えられないと言っていたし覚える気もなかった角度を1回で全部覚えてしまいました。

その子が凄いなと思ったのは、これらの知識を「ふ〜ん。そうなんだ〜。」で片づけなかったことです。その後、複雑な図形をノートに書き写すときも作図の方法を使い続けたのです。

おそらく、10年に1度出会えるかどうかというグループに属している生徒さんだったでしょう。

この盛んな知的好奇が、特に数学・理科・社会に対して中学3年生のある時期まで衰えることはありませんでした。ところが、中学3年生の2学期の中間考査が終わった辺りから急に失速を始めたのです。それまで順調良く、特に数学はどんどん進んでいて、中学生過程は三平方の定理を残すのみとなっていました。

こちらが強要したり過度の期待などをすることもなく、5科目400点以上は当

しょうや。」

学校の課題を軽んじているワケではありません。だって、それが必要な子だっていっぱいいるわけですから。たまたまこの子には必要ないだけです。こういうのを必要悪だというのでは塾長として芸がない。

しばらく、塾舎で課題の山をひたすらする日々になりました。

「そうそう。試験前に出される学校のワークやけど、もう済んでるかい？」

この辺はさすがだと思いましたね。塾舎で課題の山を全部処理できているから、帰宅後に早々に済ませたとのことでした。

そして期末考査1週間前の前日のことです。

「よし！ ついに実行日が来たな。」
「え？」というような表情をしています。そして帰宅する寸前、塾舎の扉を開けて出ようとしたときに、

「1週間前はあそぼうよ！」

そう言いました。

ホンマにね、ハトが豆鉄砲を喰らったような表情をしましたね。すると、彼が帰宅しただろう時間になって、お母様から電話が入りました。でも、実はこれも想定済みです。

たり前という意識の子でしたし、それを自ら課して450点になり、その結果に満足していました。

それが、2学期の中間考査で5科目合計が400点を下回り、370点になってしまいました。

まあ、370点と言っても、平均すれば70点以上あるので、一般的にはまずまずの点数ですよ。

さて、この80点もの転落の原因は、どこにあったのでしょうか。

● 復活への用意

あまりの転落振りに茫然自失となったのは、親御様でもなくワタシでもなく、本人自身でした。その第一の原因は勉強速度の失速でした。

ワタシは既にこの頃から「結果は小事、その対策が大事」と言っていましたし、

「この結果の手前に原因があるわけだから、その原因を一緒に考えていくのが大事だよ。」

そのように彼に伝えました。

彼はてっきりしかられると思っていたようです。

三文小説やないですが、「ナンだっ！ こんな点数とって！ どう思ってるんだっ！」ってヤツですね。

● 105点の復活

受話器を取った私の耳に届いたお母様の第一声はほぼこちらの予想通りでした。

「こんばんは。あの、息子から聞いたんですが、大事なテスト前に遊べとは、どういことでしょうか？」

怒りという感情はなくて、むしろ論理的に問うような口調だったので、そのお声にはより一層の厳しさがこめられていました。

これは別のお子さんの話なのですが、併願する私立高校はどの辺りを選べば良いかある生徒さんに尋ねられたので、

「君やったら近大附属高校と言うても、学校の先生も（受験）OKを出して下さると思うよ。」

その子は喜び勇んで帰りした。

その日、塾舎を最後に出た生徒さんが彼だったので、塾舎を閉めるために後片付けをしはじめて間もなくのことでした。

「先生っ！」

塾舎の扉のすぐ向こうから男性の怒鳴り声が聞こえてきました。目をやると、彼のお父様でした。その表情は、もう誰が見ても怒り心頭のご様子であることがすぐに分かるくらいでした。

扉を開けるやいなや、

「先生っ、どういとおつもりですかっ？」

出てきた結果で叱ってどないすんねん？ 結果なんか変えらへんやろ。

ワタシの反応が意外だったので驚いていましたが、「何が原因なんやろな？」と言って、この日は授業をせずに2人で原因を探り始めました。

その流れの中で彼がポツンと言ったんです。

「先生、勉強がおもしろくなくなってきた。それに、みんな頑張りましたので、いっつもプレッシャーがあるねん。」

心が折れかけてるやん……。

「そりゃ、みんな頑張りますからな。2学期の期末考査が天王山やしな。そんなん、条件はみんな一緒やで。」

後から追いかけてくる友人たちの足音が迫ってくるような恐怖感を、ここ2か月くらいずっと感じていたのだそうです。

「じゃあ、その子たちを俊足で遠ざける方法を探ろうか。」

「え？」

そんな方法なんてないやろ？ そんな表情をしました。あんまりしゃべらない子ですが、目は口ほどにものを言うを体現するような子でしたので、気持ちの動きはすぐに分かりました。

これもよく言うことなのですが、この心の動きが分からなくなってきたら、塾は辞めるといふものです。生徒さん

の心の動きが分からなくなったもうろくしたオッサンに授業料払いたないやろ？ というものです。

「でやな、ナンでおもしろくなくなってきたかやな……。」

おそらく、この子が本来持ち合わせている知的好奇心の湧出を阻害する存在があるのではと思ったのです。

「ナンか、環境の変化はないか？ 学校の課題が増えたとか……。」

「すると、「あっ！」というような表情をして、ポツッと一言。

「宿題の山。」

入試を控えて矢継ぎ早に出される同じ内容の繰り返しの山。もう分かりきっていることなのに、成績に関わるから毎日しなければいけない。もっとやりたいことがあるのに、それが全然出来ないというのです。

「根がめっちゃ真面目やからね、君はね。」

「でも、サボられへんし……。」

「じゃあ、割り切って、それをやっちゃえば？ 忘れていても発見できるかもしれんやろ？ モノは考えようやねん。ナンやったらここへ持って来なさい。本来は塾で学校の宿題は禁止してるんやけどな、ニンゲンが決めしたことなんかどないでもなる。今回は緊急事態やから、さっさと終わらせま

<p>息子があんなに頑張ってるのっ！」</p> <p>最初はお父様がお怒りになっている理由が分からなかったのですが、当時の私はまだ35歳そこそこで、お父様の年齢の方が高かったことから、あることが推測できました。そこで、塾舎に入っていたいただき、私が彼に受験を勧めた高校の偏差値をご覧戴きました。</p> <p>真面目でよく勉強をする子だったので、当時の偏差値で65である近大附属高校を薦めたのです。すると、怒りの表情はすぐさま驚きの表情に変わりました。</p> <p>「先生？ これ、ホンマですか？」</p> <p>「ええ。この期に及んで ウソは言えませんので。」</p> <p>しばらく無言のままその、数値をじっとご覧になっていました。</p> <p>「私が中学校時代の近大附属高校といえ、ホンマに勉強ができなかった子が、せめて高校は卒業してくれと親に言われて仕方なく進んだ学校でした。」</p> <p>すると、お顔をお上げになって、</p> <p>「そうです、そうです。」 「それこそ偏差値も35くらいでした。」</p> <p>「はい。そうです。あの学校を薦められたら、もう終わりやというように私らも言っていました。」</p>	<p>「ですよ？」</p> <p>すると、もう一度偏差値データの数値に目をやり、万感を込めるように、</p> <p>「へえ〜。こんなに高くなっているんですか…。」</p> <p>そうおっしゃるとすぐさま席をお立ちになり、</p> <p>「先生っ、ホンマに申し訳ありませんでした。息子をよろしく願います！」</p> <p>そうおっしゃるやいなや、身を縮めるようにして帰って行かれました。</p> <p>後日、お父様にお目にかかったとき、</p> <p>「いや〜、あのときは失礼しました。あまりの怒りで。息子には言わないで先生のところへ来たんです。家に帰って話したら、息子にエライ怒られました。恥ずかしいことするなって…。」</p> <p>と、頭をかいていらっしました。</p> <p>こんな感じで、いきなり怒鳴り込まれる方が論理性よりも感情が優っているので対応しやすい場合が多いのです。条件としては、こちらがどこまで自分の内面に波風を立てずに対応できるかだけなのです。</p> <p>ところが、妙に冷徹な論理性で問い正される方が難しい場合が多いのは、相手の</p>	<p>論理性を上回るレベルの論理でもって相手を納得させねばならないので難しくなります。</p> <p>とはいうものの、このときは私の中にある作戦があったので、すぐにご納得いただけました。</p> <p>「お母様、『遊べ』にも色々ありまして私が彼に言ったそれは『勉強で遊べ』という意味です。」</p> <p>つまり、こういうことです。</p> <p>基本的なことをはじめ、かなり高いレベルまでの応用も十分に踏襲している子なのです。ならば、難問や超難問にチャレンジさせれば良い。簡単なロジックです。ただし、この子のレベルだから出来る荒技なのですけれど。</p> <p>この子のこのときの心の状態を蘇らせるためのカンフル剤は、テスト1週間前ということもあり、即効性が要求されます。1週間で「勉強はおもしろい」・「知ることは楽しい」という以前の彼に戻さねばならない。四の五のと言っているヒマはありません。まるで賭（かけ）のようですが、小学3年生の頃からの彼と私でしか知り得な連綿としたやり取りの記憶があって、それに基づいた「カンフル剤投与」なので、賭をしているという想いはなかったですね。</p>	<p>次の日に塾舎にやって来た彼は開口いちばんにこのように言いました。</p> <p>「でもな、先生、やっぱり基本をせな忘れへんかが心配やねんけど。それも聞いといてお母さんが言うてた。」</p> <p>「そう来るやろな。あのな、難問とか超難問をな、必ず正解せよとは言っていない。別にこの高校を受けるわけやないから正解せんでも構（かま）へんのや。大事なんは、難問にはな、色んなことを考えなアカンから、おもしろいアイデアが いっぱい詰まってる。それを君が知ることやねんな。正解せんでもエエから『遊べ』やねん。難問に対する解決のアイデアを君のアタマの中から絞り出すんやで。そのためには、君が知っていることを全部使わなアカンやろな。そんな君が、基礎を忘れるかな？ それにな、1週間くらい基礎をせえへんかったからって忘れるくらい、アンタのアタマは弱いんかえ？ こちらの意図をお分かりかな？」1週間後、全ての試験が終わり、特に自信をなくしかけていた数学についてのどのような感じだったかを聞きました。</p> <p>「中3の数学のテストって、こんな簡単やったかなって感じた。」 確かに基本は大事です。でも、ここに落とし穴があります。基本は大事だという概念にとらわれすぎれば、その子</p>
---	---	--	---

は応用に進めなくなる。ましてや、基礎とある程度の応用のカテゴリー内を何回転もすることで、今までの結果を出してきたのです。この狭い範囲でいくら回転しようが、もうこれ以上の結果を出せないというレベルの問題が出題されているのに、それに気づかなかったのでしょね。そこから力尽くでも脱出して次のステージに上らないといけないことを彼に気づかせたかったのです。

結果は、数学が100点。
5科目合計は475点でした。

「友達の追いかけてくる足音は、まだ聞こえますか？」

すると、やや中天に目をやって、このように答えました。

「う〜ん。
聞こえてこなくなったかな。」
「じゃあ今度は新しい足音が聞こえてくるよ。」
「え？」
「新しいステージの子たちの心地よい足音です。」

新しいステージの子たちの足音はプレッシャーを生む足音ではありません。なぜなら、同格のライバルの足音だからです。

「好敵手の足音は君の横から聞こえます。必死で追いつき追い越そうとする足音は背後から聞こえます。この違いが分かりますか？」
「何となく分かるかな…。」
「分かればよろしい。」

編集後記

毎日寒いですね。
ニューズレター、お楽しみ戴けましたでしょうか。

昨年の10月から始めたダンベルごっこ（一応筋トレですが、ゆるゆるなので「ごっこ」なのです）とウォーキングですが、ちまちまと続けております。始めた理由なんぞは追々、このニューズレターで書いていきますね。

ここ最近では寒いので、ウォーキングは「したつもり」という「つもり歩き」を決め込んでおりますが、それにしても長居公園が随分と変わりましたね。

11月くらいですと、ひんやりとはしているものの、塾業務を終えてから夜の公園を歩くのも一興やなと思うようになりました。

驚かされたのは、思っていた以上に公園内が明るいことです。私がこの長居に移り住んで早45年ほどになります。当時の長居公園の夜間なんて外灯も申し訳程度にあるだけで、不用心が先立って怖くて行けませんでしたものね。

それがあなた…、昨年の7月辺りから随分と変貌を遂げました。

特に夜間です。午後10時半頃までカフェとかフットサルの事務所とか、スケボーのところがなんてお若い人のために夜通し明かりがつけられていますからエライ変わりようやなど、感心しきりです。3月に入ると、昼間の気温が上がってきますので、そろそろ真面目にウォーキングを再開しましょうか…。

